

ブリティッシュ・コロンビアの誕生(下) 鉄道と引換えに連邦加盟

ゴールド・ラッシュが起こって、米
国から何千人もの男たちが国境を超え
てやって来るのに驚いたバンクーバー
植民地のダグラス総督は、当時バンク
ーバー島以外には何の権限もなかった
が、米国による併合を恐れて、英本国
の訓令を待たずにただちにいくつかの
手を打った。

ダグラスはまず、一帯で発見される
金はすべて英国国王に属すると宣言し
て、採鉱者一人当り毎月五ドルの料金
を課すとともに、すべての人々は英国
の法律に従うよう、警告を発した。

一八五八年八月、バンクーバー島を
除く一帯はブリティッシュ・コロンビ

ア植民地となり、ダグラスは正式に新
植民地の総督を兼ねることになる。判
事と警察部長も着任し、これで一応
「法と秩序」が確立された。

ダグラスはまた、道らしい道もなか
った山中に、馬車の通れる道路を建設
した。新しい道路を、荷馬車や駅馬車
が人や物資を積んで町から町へ運び、
牧場の牛が群れをなして歩いていった。

ゴールド・ラッシュは、あつという
間にやってきたかと思うと、あつとい
う間に去っていった。金脈を掘りあて
て財をなした者もいたが、大ていの場
合はせっかく手に入れた金を賭けごと
などで失い、好運は長続きしなかった。

ビリー・パーカーがビクトリアで死ん
だときは一文なしだったし、ジョン・
キャメロンはオンタリオで全財産を失
い、もう一度の夢をたくしてパーカー
ビルへ戻ってきたが、失意のうちに死
んだ。せっかくひともうけても、未
路は餓死という場合もあった。

しかし、確実に残ったものも多い。
ゴールド・ラッシュが去ってからも、
それに続いて起こった商業、農業、牧
畜業、漁業、製造業などは、ブリテイ

ッシュ・コロンビアの産業の基盤を作
った。川沿いにできたいくつもの町の
中には、ゴースト・タウンと化したの
もあったが、パーカービルやニュー・
ウエストミンスターなどのように、そ
の後栄えたところも多い。

とはいえ、金鉱に依存しきっていた
バンクーバー、ブリティッシュ・コロ
ンビア植民地は、金がとりつくされる
頃になると、財政的な困難に陥った。

そこで、英国政府は一八六六年、両植
民地を合併して、ブリティッシュ・コ
ロンビアに統合する。

ブリティッシュ・コロンビアが不況
を訴えていた頃、東部の英領植民地で
は連邦結成が進められていた。そして
一八六七年、カナダ、ニュー・ブラン
ズウィック、ノバ・スコシアの三州は
結集して、自治領カナダが発足する。

(連邦結成後、カナダ州はオンタリオ
州、ケベック州に分割)。

米国では、ブリティッシュ・コロ
ンビアを併合して、米国の領土をア
ラスカと地続きにすべきだ、との声が高
まっていた。グラント大統領は、ブ
リティッシュ・コロンビアまで鉄道を
延ばせばそれだけで併合できるので
ないか、と議会で述べている。

ブリティッシュ・コロンビアでも、
不況から脱するには、カナダまたは米
国との連合しかないという論議が起こ
っていた。一八六九年には、米国との
合併を要請する文書が米国政府に送ら

れたが、署名したのはわずか
百四人だった。

一方、新聞発行者で、
熱烈な君主制支持者だ
ったアモール・デ

・コスモス(「宇宙
を愛する人」と称
したビル・スミ

スやハドソン
湾会社の関
係者の中
心に、カ

ナダ連邦加盟
への動きが活発化した。

発足したばかりのカナダ連邦政府は、
「海から海へ」の夢を実現すべく、閣
僚の一人ヘクター・ルイス・ランジェ

ピンをブリティッシュ・コロンビアに
派遣。ランジェピンは、ブリティッシ
ュ・コロンビアの美しい風景に感激し
つつ、同植民地が連邦に加わるならば
鉄道を太平洋側まで延長すると約束し

た。ロッキー山脈をこえて、カナダの他
の地域と連結しようというわけである。
ブリティッシュ・コロンビアは、こ

の約束にひかれて、連邦加盟を決意す
る。連邦に加わったのは一八七一年七
月二十日であった。一八八五年十一月

には、モントリオールからバンクーバ
ーまでのカナダ太平洋鉄道が完成(実
際の通過は翌年)、ブリティッシュ・コ
ロンビアは名実共にカナダ連邦の一員
となった。(Y)

